

随想集

赤いベレー帽

丸岡
明

講談社

赤いベレー帽



定価／八八〇円

昭和四四年一月二八日第一刷発行

著者／丸岡明

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―一二―一二

電話 東京(九四二) 一二一一(大代表) 郵便番号 一二二 振替 東京三九三〇

印刷所／信毎書籍印刷株式会社

製本所／有限会社 文信社

© 丸岡明 昭和四四年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

Printed in Japan

目 次

I

旅びと

空の旅

ニースと国際ペン大会

北極圏への旅

サウナと早春の湯

ティヴォリと午前三時

パリの女たちと智恵

ローマナ

ナボリの歌祭

鉛筆とコモ湖畔

飾り窓

パリの衣食住

86 76 72 69 62 55 45 38 28 25 18 13

鍵の生活

五七年のパリ祭

外国旅行のメモ

夜の鶯

卵は地球の何処でも立つ

Ⅱ

寒椿

寒鰯の肝

原爆と知識人の死

捕り手物語

戯文・奥野信太郎

軽井沢高原の文学散歩

167 158 153 132 126 119

112 109 98 94 91

毒舌家・神西清

東西交流のペン大会

処女作の頃と今

東京新風景

宗教と日本人の心

三田文学の復活

佐藤春夫の死

日記

新宿随想

私の文学修業時代

モラヴィア氏とのつき合い

Ⅲ

こおろぎ談義

178

184

194

197

200

203

210

213

216

220

224

231

宮城前広場

文楽のこと

似而非写真師のいる風景

白犬二匹

禁酒のたのしみ

暁星時代

海龍五寺の旅

台風の季節

岩魚乙女

谿谷の休日

ある海辺の漁師たち

男のきもの・女のきもの

鯨の卵

京の宿

弁護士会

海の幸

孝行そば

新春

落としてもなお醍醐味

山の家

雨の馬瀬川

ゞざこ・くらぶゞとはぜ

日本橋付近

紅茶とコーヒーの感慨

はとの羽ばたき

麻雀ところどころ

IV

フレンチ・カンカン

海外に紹介する能と狂言

能とパントマイムの接点

ルネ・シフエール氏への手紙

能の旅

能楽三代

父桂の素描

V

赤いペレー帽

チャリシヤのパン

病床日誌

あとがき

437

410

407

401

392

387

376

371

364

358

353

造本 伊藤 積

口絵写真撮影

中谷 吉隆

(ミセス提供)

随想集

赤いベレー帽

I

旅びと

六月四日に羽田を発って、中旬にニースで開かれた国際ペン・クラブの総会に出席した。ローマからニースにゆく海岸沿いの汽車からのながめは、その色彩がひどく美しかった。会を終えて、パリにゆき、七月いっぱい、ヘルシンキへオリンピックの記事を書きに出掛けた。

オリンピックが終ってからは、アメリカ人のコレスポンドントに誘われて、自動車で北極圏の旅に出た。一日じゅう、自動車で走りづめに走っていても、森林と湖水ばかりで、人に会わぬような日があった。

スカンジナビヤを一周して、オスロに出、オスロからストックホルム、コペンハーゲンを経て、ドイツのハンブルグまでその自動車旅行を続けたが、なにしろ二十一日間走り通しのような

旅行だったので、体が疲れ、ハンブルグからは、飛行機でパリにもどった。

パリで暫らく体を休めて後、ロンドンにゆき、も一度パリにもどって来て、今度はいよいよ最後のパリになると思ったので、シャトルヘカテドラルを見にいたり、夢中になって見物を始め、それからスイスにゆき、北イタリーを見て歩いて、最初のローマにもどって帰って来た。

永いようで、短かった。私は惚れっぽいのか、何処の街も好きになったし、料理も酒も煙草もその国々のもので満足した。

戦争の痛手は、英仏側にも、敗けたドイツやイタリーやフィンランドにも、まだそのまゝ残されていた。

ノールウェイのナルビックの湾には、半ば沈んだ貨物船が、腐った魚のように、赤錆びた腹を見せていたし、ハンブルグの街には、外壁だけが残って中のがらんだ一区画があった。ロンドンには豪華なショウ・ウィンドウの隣りが、爆撃を受けたまゝのところなどがある。

住宅難は、日本だけの問題ではないが、どの国の都会にも、新しい立派なアパートが、どしどし立ちつゝあった。

ロンドンやハンブルグの場合でいうと、戦争の跡かたづけをする暇をはぶいて、新しいアパートを建て、生産にはげんでいるという印象を受けた。街全体が蒸気を吹いているような風だった。

市民の生活を、まず考える政治のあり方は、どうやら日本の場合と、大分異っているらしい。